

谷垣守手寫本「關市令義解」

石
尾
芳
久

阿波国美馬郡の源元寛が、令義解の古写本を得て、明和四年正月公刊した関市令義解が、関市令義解の世に出た最初のものである、と考えられていたけれども、明和四年よりも二十一年遡る延享三年七月二日に成った谷垣守手写本「関市令義解」の存在は、源元寛の公刊の以前において、既に関市令義解の古写本に関する研究が、高い程度において進んでいたことを証明するものであり、その意味において貴重な史料である、といわなければならない。谷垣守手写本「関市令義解」の識語は、次の如くである。

右關市令義解一冊蒙羽倉兄惠示於武江藩邸謄寫校合畢

延享三年丙寅七月二日

谷垣守

すなわち、右の識語によれば、荷田在満蔵本関市令義解を手写したものであることが、明らかとなる。荷田春満、在満が近世律令学の発展に如何に大なる貢献をなしたかを如実に物語る史料である、といえる。これを手写した谷垣守の手写本は、「残律」と同様、彼の人柄が真摯のものであり、また学識の深いことを示している。

右手写本をみてまず考えられることは、それが源元寛刊行関市令義解と同一系統の写本にもとづいている、ということである。周知のように、関市令義解の初条は、寛本と塙本との間に大なる相違がある。谷垣守の手写本の初条は、寛本と同じである。

つぎに、右手写本の特色ともいふべきものは、散逸した関市令集解の断簡を記録しているという点である。弓箭条に、按古記云東邊北邊謂陸奥出羽等國一也とあり、除官市買条に、按職制律断契有數違負不還者類此稱違耳讚

云懸^ハ貫也 とある。この二カ条の集解逸文は、国史大系本においては、義解紅本裏書により補せられている。谷垣守手写本「関市令義解」において、関市令集解逸文拾遺への顧慮が払われているということは、この時期の律令学の一断面を示すもの、といわなければならない。

右手写本には、括弧□の中に校勘を施している。極めてすぐれたものであって、既に、源元寛校合の水準をはるかに抜いているものであり、国史大系本の校合と比較しても、なお、考慮に価するものなしとしない。

官司条義解に、其関津糺獲及里長防長於其防里捉獲者亦皆没官也として也字を加え、元無也字者即是脱失 といふ校勘を付しているが、国史大系本には也字がない。

每肆立標条義解に、其餘上^レ下二品 として中を上に変え、上元作^レ中者傳寫之紕繆 といふ校勘を付しているが、国史大系本では、其餘中下二品 とある。

同条義解に、本司者京職及國司也として也字を加え、元无也字者即是脱落 といふ校勘を付しているが、国史大系本には也字がない。要するに、谷垣守手写本「関市令義解」は、近世における関市令義解の写本の源流を示すものとして注目しなければならない。

以下右手写本の全文を掲げる。

関市令義解

関市令第廿七

謂^ハ關者關津^ヲ即關門日出開條以上是也
市者市郵即市以午時集條以下是也

凡人欲向關國而請過所者本部具錄其事及人物名數二通申送所司所司勘問即署一通留爲案一通判給謂本部者被管之司假行人是京人假下當有如下字而向關國者須請給過所先申本寮本司署訖送於京

職職更判給行人是外國者先經本郡而後申國若有本司者亦署判給按外國而別稱本司者大將出征等是其過所官司檢勘聽過其欲還者

連來文謂連來文者假有行人更欲還京國者皆將來時過所而請還時及所詣請給若於過所故云連來文也其依下文即知未去之間過所仍得隨身

來文外更有故者驗實聽之日別總連爲案若已得過所有故卅日不謂亦去者

謂既以卅日爲限即不滿限者不可更改給將舊過所一申牒改給若在路有故者卅日其關司准計行程不過卅日亦聽過度也

不謂亦去者其雖非在一處經卅日而通計乃滿限者送舊在狀上者顛倒也申隨近國司具狀送關雖非所部有亦當國官司具狀送關也

來文二者亦給謂假有行人取本部過所來更亦欲向他關國而經當所請過所者雖非是所部緣其有來文亦判給之類也若船筏經關過者謂

門及攝津其餘不請過所者謂亦不在此限亦請過所

凡人出入關津者謂行人者公私皆是也津者攝津其要略津濟置船運度自依雜令不關此條也皆以三人到爲先後不得停

ト、コホル「擁也」也

谷垣守手写本「関市令義解」

按入及津字並衍字乎

凡行人度^{コユル}入^ニ關^ヲ津^ヲ者皆依^ニ過^レ所^ノ所^レ載^レ關^名一^ニ勘^ヘ過^セ若^シ不^レ依^レ所^ノ詣^{ユク}別^ニ向^ニ餘^ハ関^者關

司^レ不^レ得^ニ隨^レ便^ニ聽^ニ其^ノ出^ラ入^一

其上元有便
字者衍文

凡行人^{モツン}賚^ニ過^レ所^ヲ及^ヒ乘^テ驛^傳馬^ニ出^ニ入^關者^ヲ謂^ル驛^子傳^子並^ニ无^ニ歷^名直^計人^數一^ヲ關^司勘^過錄

白案記^ニ謂^ル凡^レ行人^度關^者關^司皆^レ寫^其過^所若^官符^ヲ以^テ立^案記^直於^白紙^錄之^不點^朱印^故云^錄白^也其^正過^所及^驛鈴^傳符^並付^行

人^ニ自^シ隨^レ仍^驛鈴^傳符^年終^錄目^申太^政官^一謂^ル附^朝集^總勘^使申^送總^勘

凡^レ丁^匠上^役及^庸調^脚度^關者皆^據本^國歷^名一^ニ謂^ル此^令歷^名與^ニ共^ニ所^レ送^使勘^度其^律總^歷義^同也

役^納畢^ニ謂^ル丁^匠役^畢還^者勘^元來^姓名^年紀^一以^立注^記當^其還^時據^レ此^勘放^同放^還

凡^レ弓^箭兵^器並^不得^レ下^與諸^蕃市^易其^東邊^北邊^一按^古記^云東^邊北^邊不^レ得^レ置^鐵冶^一

按古記云東邊北邊
謂陸奥出羽等國也

謂^治者^練
鐵^之處^也

凡^レ蕃^客初^入關^日所^レ有^一物^上關^司共^當客^官人^一具^錄申^所司^一謂^ル關^者初^所經^之關^若無^關處

者國司檢校當客官人者領客使也
所司者治部省

入關以後更不須檢若無關處初經國司亦

准此

凡官司未交易之前不_レ得_レ下私共_二諸蕃交易_一爲_レ人糺獲者_二三分其物_一一分賞糺
人一分没官没官上元無一分二字者即是脫落也
若官司於其所部捉獲者皆没官謂不限部外人唯爲當所官

司捉獲者皆是若於他界交易而本部官人遣捉獲者合賞一分其關津
糺獲及里長防長於其防里捉獲者亦皆没官也
元無也字者即是脫失

凡禁物不得將出境若蕃客入朝別勅賜者聽將出境

凡關門並日出開日入閉

凡市恒以三午時集謂日中爲市致天下之民是也日入前擊鼓三度散每度各九下

凡市每肆立標題謂肆者市中陳物處也按玉云陳除珍反周禮陳其貨賄鄭玄云陳猶處也題三行者元无者字者脫失也假如題標條云網肆布肆

之類市司准貨物時價爲_二三等謂準貨物時價者凡物各有上中下三品即其價直亦物別各有上中下三等故總有九等沽價即下條云准中沽

價是准中物中沽價文_二准貨物時價_一即知據市歷交關之價官不別立沽價法也爲三等者假如
一句沽價上布一端或錢三百或三百五十或四百即依中沽三百五十五立沽價法其餘上下二品

上元作_レ中者傳寫之紕繆 十日爲_レ一薄_レ在市案記季別各申_レ本司_レ 謂_レ官家交關及_レ亦依_レ中沽爲_レ定故云_レ三等也 懸_レ詳_レ依_レ下條

詳當作_レ評 贓物_レ皆據_レ中沽價_レ故立_レ此案記_レ本司者京職及國司也 元无也字者即是脫落

凡官與_レ私交關以_レ物爲_レ價者准_レ中沽價_レ即懸_レ評_レ贓物_レ者亦如_レ此 謂_レ假如有_レ人正月盜得_レ絹一疋_レ一網

元作_レ絹者非 准_レ沽錢_レ五貫而六月事發者即以_レ五貫_レ錢_レ退_レ准_レ正月上布中沽依_レ其所得_レ布數_レ科_レ罪之類故案_レ律濫_レ濫_レ當_レ作_レ監_レ守盜得_レ一疋_レ上絹_レ已費_レ訖即不_レ除_レ名爲_レ懸_レ評_レ取_レ中沽_レ又依_レ律有_レ實價貴賤與_レ沽_レ不同_レ亦依_レ沽爲_レ定即贓見_レ在_レ者亦取_レ見_レ物中沽_レ准_レ上布沽價_レ其所犯_レ之人不_レ爭_レ責_レ賤_レ者亦與_レ見_レ在_レ贓_レ同

凡官私權衡度量

按雜令權衡者銖兩斤也度者分寸尺丈也量者合升斗解也

每年二月請_レ大藏省_レ平校 謂_レ凡諸司及庶

人用_レ權衡度量_レ皆請_レ大藏省_レ平校_レ然後用_レ之諸國并要用_レ官者司別給_レ樣_レ也依_レ律雖_レ平而不_レ經_レ官司印_レ者皆卅即知_レ平校_レ日官司題_レ印_レ但唐令云_レ並印_レ署然後聽_レ用_レ此令_レ除_レ印_レ署_レ文_レ故不_レ可_レ署_レ唯依_レ律可_レ印_レ即與_レ量函_レ不_レ同 不_レ在_レ京者請_レ所在國司_レ平校_レ然後聽_レ用

凡用_レ稱者皆懸_レ於_レ格_レ用_レ解者皆以_レ概 謂_レ稱_レ者稱_レ量輕重也格_レ者橫_レ木_レ所_レ以_レ懸_レ稱_レ也概_レ者量_レ所_レ以_レ平_レ斗_レ解_レ也 粉麵則稱_レ之

謂_レ米屑曰_レ粉 麥屑曰_レ麵

凡賣奴婢皆經本部官司取保證立券付價
謂奴婢之生自修辭牒連保證署其馬

牛唯責保證立私券
謂不經官司自立私券私賣與其餘貨物不在此限

凡出賣者勿爲行濫
謂不率爲行也 牢元作罕者
其橫刀槍鞍 謂橫刀者劍也槍 漆器
戈屬也鞍鞍橋也

之屬者各令鑿造者姓名
謂鑿鑿也 按鑿似
劍反小鑿也鑿也

凡在市興販男女別坐

凡以行濫之物交易者没官短狹不如法者還主

凡除官司市買者皆就市交易不得下坐并ナカヒ召物主
謂雖在市而不得復坐他肆召也 垂違時價上ヲ不レ論官司

私交付其價不レ得懸違
按職制律斷契有數違負不還者類此稱違耳證云懸者貫也 謂懸者物主相許也 違者物主不知和也

右關市令義解一冊蒙羽倉兄惠示於武江藩邸膳寫校合畢
延享三年丙寅七月二日
谷垣守